

# コーヒー一杯の出会い

東北大学素材工学研究所助手 岡部 徹

早稲田先生との最初の出会いは、以前にサンフランシスコで開催された春季 TMS 大会でした。先生が日本人としては創設来初の荣誉ある Leadership Award を受賞された今年の TMS の大会は、その丁度その六年後にあたります。当時私は、MIT でポスドク生活をしており、東海岸のボストンに住んでおりました。ボスのサドウェイ教授から TMS 大会に参加するので、一緒に参加しないかとお誘いを受け、鞆持ちとして西側のサンフランシスコに行ったのが私にとっては大きな転機でした。TMS の学会会場の廊下でお見掛けした一人の日本人紳士を指差し、「トール、あの日本人を知っているか？」とボスが訊ねてきました。「いや存じ上げません」と答えると、「じゃあ、俺が紹介してやろう。日本人のくせしてあの高名な早稲田教授を知らないとはな...」と言って紹介して下さいました。京大の大学院を受験した者は、早稲田先生の熱力学の教科書を勉強するのが必須課題となっておりましたので、学部生の時分から先生のお名前は目にしておりましたが、まさか、米国人のボスに初めて紹介されることになるうとは思ってもおりませんでした。

学会会場の廊下のベンチでコーヒーを一杯飲みながら三十分ほどお話しましたが、仕事の話はほとんど出ず世間話に終始したように記憶しております。ところで、早稲田先生はこの日に International Activities Committee で基調講演をされました。今回のご受賞のコメント欄（本資料 p.7~8）にありますように、“学会は非常によいものであった”と述べられておりますが、ひょっとしてこれには私との出会いも含まれているのではと勝手に解釈させて頂いております。先生が TMS 大会からご帰国された後、しばらく経って東北大素材研に来ないかとのお誘いを受け、現在に至っているわけです。たった一杯のコーヒーの出会いで人生が大きく変わることもあるものだ、今から思えば不思議な気がします。

私が素材研に赴任してからの最初の三年間は、主として早稲田先生が初代のセンター長を勤められた素材再生プロセス研究センター物理再生部門の立ち上げに従事しました。そこでの一番の思い出は、TMS の機関誌である JOM への寄稿の準備です（これについても今回のご受賞のコメント欄に引用されております）。三年ほど前、JOM の編集部から突然メールが届き、10日以内にチタン精錬の新しい展開について原稿を書くように依頼されました。英文原稿のネタがありませんでしたので、私は時間的に無理だと思いつつ早稲田先生にご相談に上がったところ、受けましょうと即答されました。プルーフ・リーディングに要する時間も考えると、1週間弱で脱稿しなくてはならなかったのですが、前向きかつ熱心に対処して下さいました。早稲田先生は、その時も大変お忙しい時期だったにもかかわらず、原稿の修正指示やテキストのやり取りは電光石化の対応でした。私の仕事がなかなか捗らず大変ご迷惑をおかけしましたが、夜遅くに電話で「何ページの は」とお教え頂いた機会に恵まれたのは大変貴重な経験でした。

私が早稲田研の助手をしていた時、早稲田先生が一ヶ月ほどトロント大学に出張に出かけられた時期がありました。ボスからの仕事がない平和な一ヶ月は私にとっては羽根が伸ばせるパラダイスでしたが、あっという間に過ぎてしまいました。早稲田先生はご帰国後、私にフロッピーディスクを渡し、中身をプリント出力し、読んでおくように指示されました。出力してみると、途中でプリンターの紙が無くなるほどの分量で、一冊の本の数章分の原稿が出てきました。その後、秘書の江口さんと分担して原稿のフォーマットを手がけ、一冊の本が出来上がりました。私達は体裁を整えるだけで四苦八苦しているというのに、短期間で多量の英文原稿を書き上げられる先生のパワーはどこから出てくるのかいまだに不思議でなりません。

最近、早稲田先生のご母様がお亡くなりになり、残念なことです。告別式の日程上、TMSの受賞式へのご出席も急遽取り止められました。告別式当日、私がお手伝いをしていると、私を支度部屋に呼んで鞆から修正原稿を取り出し、「岡部君、遅くなってすみません」と原稿をお返し下さいました。私が一週間ほど前に提出した投稿論文の原稿が、このような場で、しかもすぐに戻ってまいりましたのには本当に驚きました。いつものことですが、私の稚拙な英文を細部にわたるまでチェックして下さいました。お葬式の準備だけでなく研究所の改組の準備で寝る時間も無いほどお忙しいというのに、下手な論文を丁寧にご修正頂けることには、何時ものことですが頭が下がります。

最も大事な祝辞が最後になりましたが、私どもの誇りともなります今回のご受賞を心よりお慶び申し上げます。私からの個人的な願いは、今後は少しは仕事のペースを落とし、健康増進にご努力されることです。仕事の速度を半分に落されとしても他人の数倍は速いのですから、あまり問題になりません。私のようにアバウトな部下にも仕事を任せて、その時間を作って下さい。今後一層のご活躍をお祈り申し上げます。

---

（'コーヒー一杯の出会い', 岡部 徹: *TMS・The Leadership Award 2000 受賞記念祝賀会資料*（東北大学素材工学研究所早稲田研究室）, (2000) p.29-30. より転載）